

一九九〇年代共和国文学の話題作

キム・ハンヨル
金学烈

激動の一九〇〇年代もやがて終りを告げようとしている。「共和国文学あれこれ」(『朝鮮時報』一九九四、一、一三—一九九五、一二、二二)などで一九八〇年代までの共和国文学の概略は紹介したつもりだが、一九九〇年代最近の朝鮮民主主義人民共和国文学事情については未紹介だったので、このことについて触れようと思う。

一九九〇年代は世界的な社会主義の挫折の中で、社会主義朝鮮にとつて大変きびしい状況が度重なった。列強によるあらゆる攻勢の前で、しかし共和国は社会主義の旗じるしをいつそう高くかかげ、文字どおりひたすら「苦難」の前進を歩みつづけた。

一口に言つて一九九〇年代共和国文学は、朝鮮人民のこの試練のたたかいを映した「主体」(チユチュ) (朝鮮式社会主義) の文学である。ちなみに主体文学の道しるべとも言うべき『主体文学論』(金正日、三〇二ページ)が一九九二年に発表された。

ついこの前、金日成総合大学殷鍾燮博士からの資料が届いたが、それによるともつとも注目すべきは金日成主席急逝をいたんだ作品群など領袖形象文学である。宋相元、白甫欽共著共著というのは前者の初稿を後者が推敲したものとなる長編小説『永生』などをはじめ、叢書『不滅の歴史』解放後編(解放前編十五巻はすでに完結)に属する長編小説『朝鮮の春』(千世鳳)、『五〇年夏』(安東春)、『朝鮮の力』(鄭基鍾)、『勝利』(金秀卿)等

がそれである。そして労働者階級出身の詩人(文学サークルから平壤にある師範大学創作科に特別入学)として一躍名を馳せた金万永の長詩『偉大な領袖は永遠にわれわれとともに』、『平壤の間は永遠に』等々。

またこの年代に金正日総書記を描いた叢書『不滅の嚮導』の創作がはじまり、鄭基鍾の『歴史の大河』や李鐘烈の『英知』などが出た。

現実テーマの作品では、人民大衆中心の朝鮮式社会主義の正当性を芸術的に確証し、社会主義の旗じるしを固守せんとする志向を描いたものが多い。長編小説『歓喜』(金峰鉄)、長詩『守護者の宣言』(呉映在)などである。呉映在は、私と年齢も同じでごく親しい間柄である。もつともこの人の詩は、やや政論的色彩が濃厚すぎるくらいもあるが。

九〇年代の文学では、祖国のテーマの創作に力が注がれたことも顕著な特徴の一つだと言える。多部作映画シナリオ『民族の運命』は、今およそ五〇部くらいに達している。これは、いろいろな人生の道を歩んだ様々な人物の運命線を幅ひろく描きながら、民族の運命と個人の運命に関する哲学を主体の革命的世界観と人生観、民族観にもとづき展開している。カップ(朝鮮プロレタリア芸術同盟)編も入っているが、これは早稲田大学などでもロケが行われ、李燦、趙明熙、朴八陽や李光洙、崔曙海、金素月

らのエピソードもまじって、なかなか興味深い。

そのほか軍民関係のテーマ、祖国統一と在日など海外同胞の生活に關したテーマの創作も注目をあびた。

文学形態の見地からすると、九〇年代は巨編形式の秀作が続出したが、これは確かに新しい特徴の一つである。

小説の分野では叢書形式、多部作形式、詩の分野では長詩、叙事詩、叙情叙事詩、連詩などが次々とあらわれ、映画シナリオでも『民族と運命』のような非常にスケールの大きい多部作が出現した。これら大作の題材は多様にわたるが、いずれも時代精神をあざやかに映し出しているという点では共通した重要な特徴だと指摘することができる。

九〇年代詩壇では、金万永、呉映在、柳東浩（叙情叙事詩『司令官と近衛兵たち』）の活躍が目立った。

小説分野では、ノンフィクションの傾向と言おうか実話性の強化が一つの特徴として出てきた。実在の人物をモデルにした長編小説『赤い土』（金青南^{キム・チヨクナム}）私自身とも面識が深い個性的な「おもしろい」作家）は黄海道の人民委員長（知事）だった李竜鎮英雄（戦争時に戦死）を描いたものであり、『時代の願い』（李浩仁^{リ・ウジン}）帰国作家）は金正日花を哉った園芸家加茂元照氏の研究の姿を扱ったものである。

九〇年代小説文壇では、長編ものの作家として鄭基鍾と宋相元が新しく頭角を現わし、盧正法、韓雄贊がすぐれた短編小説家としてめざましい活躍をつづけた。盧正法の短編では『待つ母』（『朝鮮文学』一九九三、一〇）、韓雄贊の短編では『新しい岸』（『朝鮮文学』一九九〇、五）が注目をひいた。韓雄贊は短編ばかり書

く作家であるが、「朝鮮のチエーホフ」とも称されている。

韓雄贊の小説などが安宇植氏によって『すばる』一九九七年八月号に紹介されたさい、例よつての誹謗調の解説もついた。一九九七年の秋、朝鮮大学文学部学生らの祖国研修の折、私もつきそいの形で平壤を訪れたが、創作実習の指導に韓雄贊が来たので、当然親しく接した。

「あなたの作品を翻訳し、このように悪しざまに解説してしますよ。彼、安氏はあなたをよく知っている」と述べながら、名前を雄贊でなく応彬と記していますね」と私は皮肉げに質した。

まだ若い方の、五〇代の彼は苦笑しながらつぶやいた。

「贊の字はむつかしいから、いざ知らぬとしても、雄の字を応とまちがえるとは、誹謗の念にはやって目がくらみ、点もよく見えなかつたにちがいない。どうせ学生らに急いで仕事をやらせてのことだろうて……」

ちなみに韓雄贊は口数の少ない人だが（私とは多弁であつたが）、南朝鮮作家の小説を最近作もふくめて系統的によく読んでいた。

次に戯曲の分野では、この期間、軽喜劇の創作に多くの関心が注がれた。中でも『手紙』（朴浩日^{パク・ウニル}）は軽喜劇の佳作として好評を博した。それで喜劇専門劇場も新設されたくらいだ。

一九九〇年代は、あと一年を残している。二〇世紀の終りを飾る共和国文学は、最近、巨編形式の作品とともに短い文学形式に深みのある人生哲学をもちこんだ創作にはげんでいるという。